

第 1 章 2007年度京都大学構内遺跡調査の概要

上原真人 清水芳裕 千葉 豊 佐藤純一

1 調査の経過

京都大学文化財総合研究センターは、吉田キャンパスおよび附属施設の敷地内における建物の新営やそのほかの掘削工事に際し、予定地の埋蔵文化財調査を、既知の遺跡との関係や過去の調査結果により、発掘・試掘・立合にわけて実施している。2007年度には、以下のように発掘調査 2 件、立合調査 8 件を実施した。

発掘調査	病院構内寄付病棟新営（病院構内 A G 16区）	（第 2 章，図版 1 - 338）
	病院構内総合研究棟（医学部保健学科）改修その他工事（病院構内 A F 14区）	（第 3 章，図版 1 - 339）
立合調査	北部総合研究棟（農学部総合館）改修その他工事（北部構内 B F 33区）	（第 1 章，図版 1 - 340）
	医学部附属病院キャンパス環境整備（旧病院開閉所）改修工事（病院構内 A K 18区）	（第 1 章，図版 1 - 341）
	京都大学稲盛記念館新築工事（病院構内 A I 19区）	（第 1 章，図版 1 - 342）
	北部総合研究棟（生物・化学系）改修その他工事（北部構内 B A 30区）	（第 1 章，図版 1 - 343）
	基礎物理学研究所改修機械設備工事（北部構内 B E 34区）	（第 1 章，図版 1 - 344）
	中央総合研究棟（旧工学部 7 号館）改修その他工事（本部構内 A Z 30区）	（第 1 章，図版 1 - 345）
	白浜海の家新営その他工事（和歌山県瀬戸遺跡）	（第 1 章，表 1 - 346）
	医学部図書館改修その他工事（医学部構内 A L 19区）	（第 1 章，図版 1 - 347）

2 調査の成果

前節で掲げた発掘調査のうち、整理を終えたものについて、その成果を略述する（括弧内は図版 1 および表 1 の地点番号）。なお、病院構内 A G 16区は第 2 章，病院構内 A F 14区は第 3 章で、調査成果をそれぞれ詳述しているので参照されたい。また、和歌山県瀬戸遺跡の立合調査については、白浜町教育委員会（佐藤純一氏）に依頼し、その成果について本章第 3 節に詳述していただいた。

病院構内 A G 16区 本調査区は、病院東構内の西辺に位置している。遺跡の基盤を構成する黄褐色砂群の検討から、調査区中央付近を南北にはしる礫堤を母胎とする高まりが

あり、この高まりの東側には粘土層の堆積にみられる後背湿地状の窪地、西側には厚い砂礫層の堆積で示される高野川系流路の氾濫原が形成されていたことが確認された。また18世紀に高野川系流路の左岸を通過して、土石流が及んだことが堆積物から判明した。

調査区の東西で異なる自然地形のありようは、近世の土地利用形態に影響を与えた。調査区の東辺では浅い鋤痕のようなピットや格子目状に連なる浅い溝群、西辺では短冊状の浅い溝列や不整形の土坑が分布しており、東辺は水田として、西半は畑作地として利用されたと想定できた。また畑作地としての利用が想定される西半は、細かくみると、基盤となる土層の状況と構築されている遺構の種類の違いに対応関係が認められ、生産された作物の違いが反映されていると考えられた。

中世に関しては、14世紀の井戸1基、15～16世紀の井戸が5基みつかったにすぎないが、隣接地点ではこの時期の遺構・遺物は大きく減少する時期なので、むしろ補完的關係を示すものとして注目できる。ただし瓦類はほとんど出土していないので、本調査区周辺一帯は、居住地から耕作地へと土地利用形態を変えていったと想定された。

井戸や石垣の石組については、積み上げの順序を記録しつつ調査を進めた。その結果、石積みは、一定方向に礫を積み上げていくのではなく、ある程度のまとまりで数段積み上げ、その単位のまとまりで構築していることが明らかとなった。こうした技術が必然的なものなのか、工人差や時期差などがあるのか、類例を増やしていく必要がある。

病院構内A F14区 本調査区は、病院西構内に位置し、『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ』で報告した調査地点に隣接する地点である。調査地点が3ヶ所に分かれていたため、便宜上、東調査区・北調査区・西調査区と呼称して調査を進めた。調査の結果、それぞれの調査区における土地利用の歴史は少しずつ異なっていたことが明らかになった。

古代以前は、いずれの調査区も高野川系流路の影響下にあり、人間の活動地点からは、はずれていた。中世段階では、東調査区を含む一帯が人間活動の中心地となり、西調査区付近は依然として高野川系流路の影響下にある不安定な土地であった。北調査区付近は、北東方向から南西方向へと道路が伸びており、土地境界をなしていた。この道路ないしは土地境界は近世まで残存していたことが遺構分布から推定された。そして、近世にいたると、調査区一帯は畑作地として利用されたことが明らかとなった。

このような土地利用の変遷は、従来の調査成果を支持する結果であるが、北区で土地境界となる道路を検出したことにより、中世の遺跡の北側への広がりを絞り込むことが可能となった。

3 和歌山県瀬戸遺跡の立合調査

調査の経過 瀬戸遺跡は和歌山県西牟婁郡白浜町の京都大学フィールド科学教育研究センター瀬戸臨海実験所内に位置する。実験所構内全体に遺跡が広がっているようで、過去に試掘・発掘調査が実施され、縄文時代から奈良・平安時代にいたる遺構・遺物が確認されている〔泉ほか1980, 泉・花谷1984, 中村友1977, 丹羽1978〕。

本調査地点は瀬戸臨海実験所構内の北西端部に位置し、田辺湾を眼下に臨む砂丘地となっている。現在まで調査が実施されていない地点であり、ここに寄宿舍新設工事の計画が立てられたため、埋蔵文化財の取り扱いについての協議をおこない、過去の調査成果から立合調査を実施した。

調査成果 立合調査は既存建物の基礎撤去工事と寄宿舍への通用路の緑地化に伴う工事の2件を実施した(図1)。既存建物の基礎撤去工事(2007-1)では、基礎部分の深度が最大で50cm程度であり、遺構に与える影響は皆無であると判断した。通用路緑地化地点(2007-2)は、既存建物の建設時あるいはその前後かと想定されるが、道路敷設の段階で大規模な削平を受けたらしく、平面上で遺構を確認することはできなかった。しかし、工事範囲の東壁から遺物が出土し、精査の結果遺構を確認した(図2)。

壁面観察の結果、地表下1.2~1.3mに暗褐色の遺構面が確認でき、それを掘り込んで黒

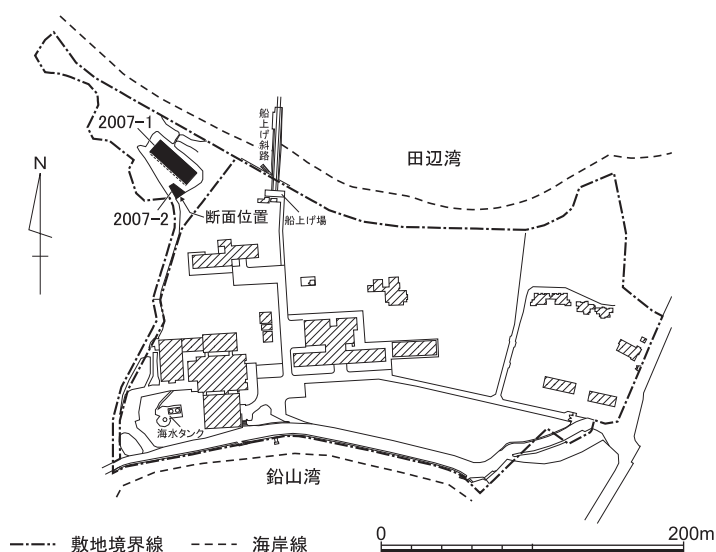


図1 立合調査地点 縮尺1/5000

2007年度京都大学構内遺跡調査の概要

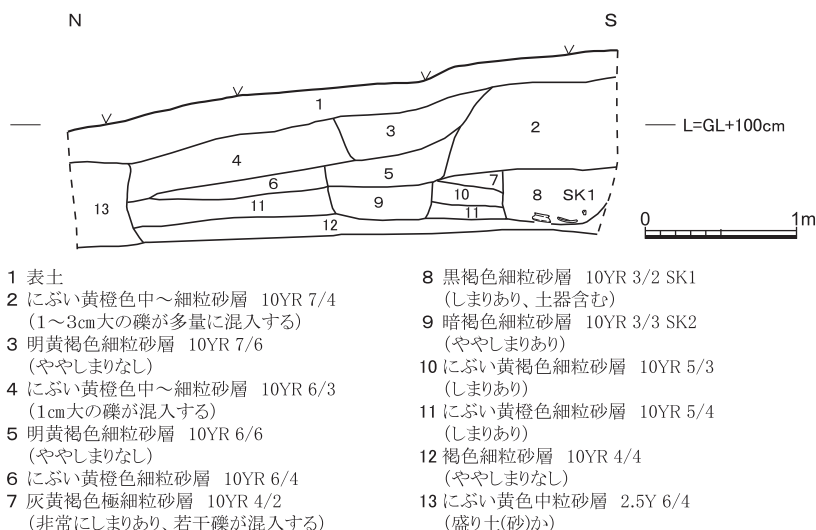


図2 2007-2 地点東壁の層位 縮尺1/50

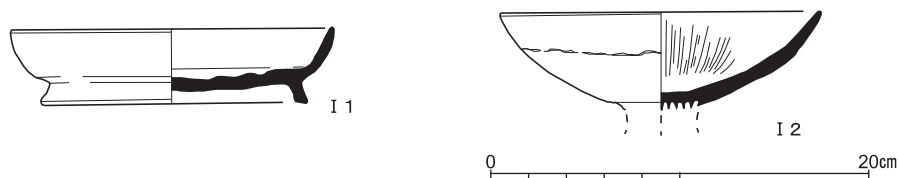


図3 出土遺物 (I 1・I 2 土師器)

褐色の埋土を主体とする土坑が2基検出できた(図2)。SK1からは、遺構底面に貼りついて完形の土師質土器の杯B(図3-I1)、同じく高杯の坏身部分(図3-I2)や須恵器の杯身部分の破片が出土した。I1は、最大高3.9cm、口径16.9cmを測る。全体的に摩滅が著しいが、内面底部に非常に強いナデが残る。I2は、残存高5.1cm、口径16.8cmを測る。外面は摩滅が著しいが、内面にはミガキが一部残存している。その他の遺物については図化に耐えうるものではなかった。精査した断面壁についてはそれ以上の掘削はせずに現状保存することとなったので、慎重工事という指示をおこなった。

小 結 今回の調査により、瀬戸遺跡の範囲の北西端部においても奈良時代の遺跡が分布していることが確認できた。1981・82年度の調査によって、遺跡中心地において奈良時代～平安時代の包含層が確認されているが〔泉・花谷1984〕、本調査地と中心地との間の試掘トレンチでは奈良時代～平安時代の遺構・包含層は検出されていないので、今回の調査成果は遺跡の変遷を論じるうえで新たな成果となる。